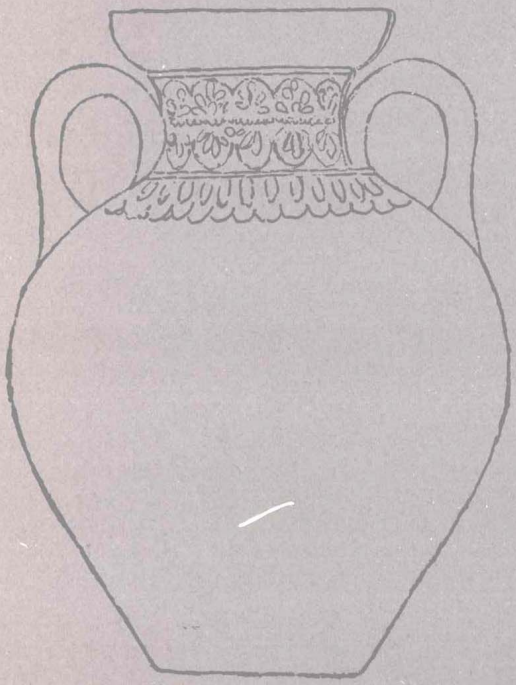
スカトロジア

●糞尿譚　山田 稔

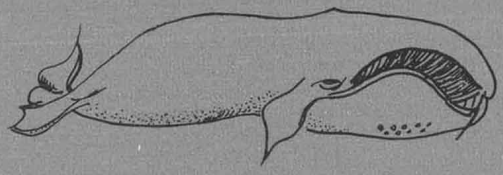


未来社刊

スカトロジア

●糞尿譚

山田 稔



未来社刊

スカトロジア（糞尿譚）

1966年4月30日　第1刷発行

定価　380円

©著　者　山田　稔

発行者　西谷能雄

発行所　株式会社　未来社

東京都文京区小石川3－7

振替 東京87385　電話（811）6966

本文整版／ふじ活版　印刷／萩原印刷

装本印刷／形成社　製本／富士製本

検印廃止　乱丁・落丁本はおとりかえします

スカトロジア ■糞尿譚■

目次

一　スカトロジアとはなにか　7
二　糞をしたって　17
三　スウィフト考　29
四　尻を拭く話　45
五　垂れながし　67
六　エセ食糞譚　89

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

七　便所にて　111
八　放屁論　123
九　陽気な破壊者たち　139
十　I外科病院にて　151
——痔よ、さようなら——
あとがき　178

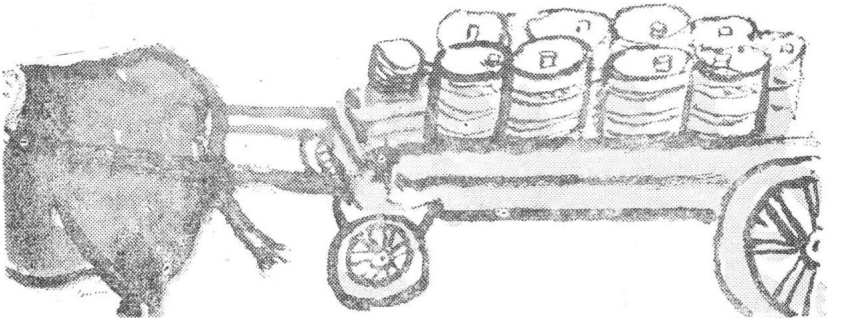
本文カット　富士正晴

スカトロジア

■糞尿譚■

VIKING に

一　スカトロジアとはなにか



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

人間の排泄物に関心をいだいている人はどれくらいいるだろうか。また、この種の関心は病的な、異常なものだろうか。糞尿に関心をいだいておりながら自分では気づかず、あるいは気づいていても、それを恥ずべきものとして隠している人も多いのではないか。

戦後まもなく、私が男女共学の高校にいたころ、それも卒業まぎわのことであるが、昼休みの時間にも教室にとどまって読書にふける男がいた。やせて青白い顔をした、いかにもベンカンらしい態度から推察するに、その読んでいる本というのは受験参考書のたぐいであるにちがいない。学制改革でいくつもの学校が合併した直後のことでもあり、私はその男の名をよく知らなかった。さて、卒業の日が近づいたころ、そのクラスで記念文集を出すことになった。全員が執筆せねばならぬという。まだだれもが共学という全く新しい体験にとまどっており、しかも卒業記念とあっては、かたくなってなかなか思うように筆も運べぬのはムリもないこと

だ。それでも熱心な女子学生のおかげで、文集はめでたく卒業式当日にみなの手にわたったのである。内容は予想していたとおり、お行儀のいいものばかりだった。が、読んでいくうちに、私はある文章まできておどろいてしまったのである。そこにはウンコが便所の底に落下するときの音が、描かれているではないか。その音の種類が、便所の状態とウンコの形状にしたがってさまざまに変化する有様を、それこそクソ・リアリズムによって描写しているのである。「螢の光」や「仰げば尊し」のセンチメンタリズムへの見事な平手打。しかもそれを書いたのが、受験参考書らしきものに熱中していた、例のベンカン風の男だと知ったとき、私のおどろきはいかほどであったか。

また以前に水上勉の『雁の寺』の映画化されたのをみたとき、あの主人公の小坊主が寺の便所の汲取りをするシーンが印象に残った。黒白映画だったが、かなり念をいれて撮ってあったように思う。カメラを便所の内部にすえて、汲取口からさしいれる柄杓(ひしゃく)をクローズ・アップする。あるいは桶に空けるところのクローズ・アップ。ぶうーんとにおってくるようだ。この映画で汲取りということはとくに大きな意味をもっているとは思われないのに、観客が「きたない」と顔をしかめるにきまっているシーンをどうしてこれほど念入りにうつすのか。いや、「きたない」と顔をしかめる一方、観客は心のうちではひそかにそれをたのしんでいるのでは

あるまいか。もしかしたら、私たちのうちにはこの種の汚物、とくに糞尿への好奇心というか関心というか、とにかくそれを拒否しない心性がひそんでいるのではなかろうか。こんなことを私は考えたものだが、たまたま『雁の寺』と同時上映の京都市製作の「市民ニュース」に水洗便所を奨励する一こまがあって、そこでも汲取りのなまなましい場面がスクリーンいっぱいにくりひろげられるのを目にしたとき、私は日本人の糞尿への寛容さとでもいうべきものを発見したように思ったのであった。

私たちが糞尿にたいしてもっている寛容さ、あるいは親近感といったものは、生活環境からいってもむしろ当然といってよいのかもしれない。ながらくつづいた人糞を肥料とする農業のあり方をはじめ、今日なお私たちの生活環境のうちには糞尿の要素が漂っているのであって、都会ではヴァキューム・カーなるしゃれた名の文明の利器が活躍しているものの、つまりは自動式の肥車にほかならず、その活躍を告げるにおいが、いまこれを書いている私の鼻にまで遠慮なく漂いながれてくるのである。とはいえ、すべての新型の車同様、この車も子供たちには人気があるのか、家の中でヴァキューム・クリーナーつまり真空掃除器のパイプをひきずりまわして「ウンコ屋さんごっこ」に打興じる子もいるのだ。このように私たちの視覚や嗅覚はいやおうなく糞尿になじませられているのだが、その結果、この親近性はたんに物質的なものだ

けでなく、ついには心理、あるいは観念にまでおよんでいるらしいのであって、現にそのことを暗に示すような小さな体験を私はもっているのだ。それはかつて私が京大人文科学研究所にいたころ、夏のリクリエーションとして、バスを借切って甲子園に巨人―阪神の野球見物に出かけたときのことである。人数がそろうのを待って、私たちのバスは研究所の前にとまっていた。そのとき急に車内がざわめきはじめ、数人が指さす方をみると、フロント・グラスにはってある団体名を記入した紙には「人糞研究所」と書かれてあったのである。「人文」を「人糞」と容易に聞きちがえるいわば心理的下地が、その観光バス会社のサービス課員にもひそんでいたのにちがいない。

さて、私が京大の学生であったころ、桑原武夫教授が文学概論の講義のなかで、「なぜ日本文学には排泄物および排泄行為がしばしばあらわれるか」という問いを出されたことがある。それはたしか、太宰治の『斜陽』のなかの、女主人公の母親が庭の植込みのかげにしゃがんで小便をする個所に関連して発せられた問いであったように記憶するが、この程度のものなら日本の近代文学のなかには無数といってよいほど例があるのではないか（夏目漱石の『こころ』にも「先生」がじゃあじゃあ立小便をする個所がある）。それらは作者たちがほとんど無意識

に描いたものであろうが、それ以外に、たとえば火野葦平の『糞尿譚』という表題が示すように、あきらかに糞尿を意識的に取上げた文学作品がいくつかあるのだ。そしてついでにいうと、芥川賞というわが国の代表的文学賞の受賞作品に「糞尿譚」というそのものずばりの表題がついているという事実だけをとってみても、いかに私たちが「糞尿」にたいして寛大であるかが分るのである。

しかし、「糞尿譚」は日本にのみあるのではない。

英語にスカトロジー（scatology）という単語があり、N・E・Dによれば「糞便を手がかりとして診断を行う学問の一分野」という意味、さらには「糞尿譚」「糞尿趣味」といった意味が派生したものとされている。この言葉は歴史的には一八七六年にはじめて用いられたものらしく、「スカトロジーという言葉は scateo（糞便）から派生したものかもしれぬ」というスウィフト氏の指摘」という文例があげられている。フランス語としてこの言葉（scatologie）が用いられるようになったのも十九世紀末であって、最初はおそらくはゾラ、ゴンクールらの自然主義文学にたいする誹謗の意味で用いられたのではないかと想像するが（事実、ゾラの文学は、自然主義の敵からは汚物文学などといって攻撃された）、この言葉の起源については不詳であるにせよ、当時の自然主義文学者たちはウンコ趣味を多分にもちあわせていたらしく、た

とえばゴンクールの日記の一八七四年四月十日の項に、フロベール、トゥルゲーネフ、ゾラ、ドーデらが集って晩めしをくったとき、「ある人が、文学における便秘患者と下痢患者の特殊な素質に関する堂々たる講話で話の糸口を切り、それから話はフランス語の構造に移った」と記されてあるのだ。比喩に「便秘」やら「下痢」という表現を用いる精神は、多分にスカトロジックであると言っていいのではないか。

スカトロジーなる言葉が十九世紀末に作られたからといって、スカトロジーがそれ以前には存在しなかったことにはもちろんならない。おそらく、スカトロジーという点からいえば、日本文学のみならず西欧文学にも根づよい伝統があるような気がする。しかし、そのあり方はかなり異なっているのだろう。異なっているというか、日本文学にあらわれる糞尿の要素は、西欧でいうスカトロジーとは別ものであって、同一視することはできぬのかもしれない。日本の場合は、日本独特の文化的背景を考慮し、民俗学的方法によるアプローチが必要なのかもしれない。だが、私のウンコへの関心は、いくぶんかは、今を去ること十数年、文学部のあのうす暗い、ひんやりした、修道院のようにいかめしい教室で耳にした「なぜ日本文学には人間の排泄物がひんぱんに出てくるのか」という、きわめて知的な設問によって刺激されたものであったとはいえ、やはり、私が問題にしているのは「学問」ではないのであって、率直にいうな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com